

「感性」豊かな

自分を指して

ある小学校の先生が子供達に「雪がとけたら何になる？」と聞いた時に、ほとんどの子供が「水になる」と答える中、たった一人だけ「春になる」と答えた子供がいた（『朝日新聞』深代惇郎（ふかしるじゅんろう）氏の天声人語より）。それを聞いた先生はどうしたか・・・？「水になる」と答えた子供達には「○」をつけて、「春になる」と答えた子供には「×」を付けたというお話があります。たしかに試験であれば「水になる」が正解と言えるでしょう。今はこんなに感性の乏し先生もおられるんだなあと、非常に残念に思います。その先生にこそ「×」を付けたと思います。

運行が無ければ、このような発想は決して出てこないと言えましょう。

内村鑑三（うちむらかんぞう）氏に『寒中の木の芽』という詩があります。

① 春の枝に花あり、夏の枝に葉あり、秋の枝に果あり、冬の枝に慰（なぐさめ）あり

② 花散りて後に葉落ちて後に果失せて後に芽は枝に頭（あは）はる

③ 嗚呼（ああ）憂に沈むものよ嗚呼不幸をかこつものよ嗚呼冀望（あきぼう）の失せしものよ春陽の期近し

④ 春の枝に花あり、夏の枝に葉あり、秋の枝に果あり、冬の枝に慰あり。

「冬の枝に慰あり」とは少しわかりにくい表現ですが、葉が落ちた枯れ木であつてもよく観察していくと、ある種の慰め、癒やしの心を得ることが出来るという意味です。つまり、春夏秋冬それぞれに素晴らしい面があることを内村氏は述べているのです。花や実ばかりか、誰も関心を示さない冬の枯れ木にまで「美」を見出していった内村氏の視線は、そのまま社会的地位の高低や貧富の差、見かけの美しさなどに関係なく、出会った一人一人の違いを認め、温かい眼差しで見詰めていった人間性とも結びつきます。木々にとつて色とりどりの花を咲かせる春はとても華やかな季節です。やがて目映いばかりの新緑の季節を経て、

秋には豊かな実を付けます。私達はそういう自然の美しさに目を留めますが、やがて美しさがなくなり、枯れ木になる冬がやってきます。一面枯れ木。それは一見あまり価値が無いようにも思える光景です。しかし、その枯れ枝の中に明らかに新たな目が育まれているわけです。そのことは、「世の中に無駄な物は何一つない」という教訓とも捉える事が出来ます。

内村氏の視線は、次に自然から人間へと移ります。私達は自分が大事にしているものを失った時、憂いに沈んだり、不幸を嘆くようになったり、希望を失ったりするものです。しかし、その人にとって大事なものは本当に失われてしまったのでしょうか。私達が大事だと思っているものは多くの場合、自分にとって都合がいいものです。自分に都合の悪い出来事にぶつかつたような時、人々はそれを嫌って遠ざけるようになります。しかし、起つてくる出来事に意味のないものは何一つとしてありません。マイナスと思える出来事も、心の目で見れば自分を生かし、成長させてくれる大切な天からのプレゼントが、そこには秘められています。そのように発想を転換すると、生き方が大きく変わってきます。最も分かりやすい例が「病氣」です。

病氣は、不都合なものとして誰もが嫌います。しかし、病氣にならなくてはなかなか

か気づけない世界があるのも事実です。人の温かさや親切、健康で生きられることの喜びなど、病氣は色々なことを私達に教えてくれます。そのことが分かつてくると、辛いと思える出来事を乗り越えていこうという力が湧いてくるものです。嫌な出来事は、私達を成長させる力を裏に秘めています。内村氏はそれを「春陽の期近し」と表現しています。

「春陽の期近し」とは、人間が一番豊かな成長を遂げる期間をいいます。辛く苦しい時、自分は今大きな成長を遂げる最中にあるのだ、これはチャンスなのだと思いを大きく転換してみるのほとても大事です。そして、そうやって憂いや苦しみから逃げず、真つ正面から受け入れて乗り越えた時、その人はグツと人間的な深みを増し、人生が大きく花開いていきます。

私達の世の中は、良い事と悪いことがお互いにバランスを取り合つて成り立っています。私達を憂鬱にし、不幸にし、希望を失わせるものの中にも、必ず良い事が存在しており、そこに気付くことで私達の人生はより豊かになっていくのです。人生の様々な体験を経る前と後とは、人生の景色の見え方が変わってきます。憂いや苦しみから立ち上がり、自分を大きく成長させた人は、そういう

体験をしなかった頃には思いもつかなかった物の捉え方が出来るようになります。同じ事象を見るのでも、その見方や受け止め方の深さが、大きく違ってきます。

日本人は諸外国から、「自己アピール力が弱い」という目で見られがちですが、かつて阪神・淡路大震災や東日本大震災で見せたような落ち着いた行動、譲り合いの心、忍耐力、前向きな心といった素晴らしい面が沢山あります。そういった日本人だからこそその力や感性の豊かさは、世界の人達に大きな勇気と、生き方の示唆を与えることでしょう。

私達に大切なのは、自分の目の前に起こってくる出来事を、素直に真つ正面から受け止めることです。その上でその出来事が何を教えてくれているのか、知恵を深めて見つめることです。マイナスに思える出来事の中にも人として成長していくだけの力が与えられている事を思えば、乗り越えようという力が湧いてくるものです。

喜びという感情は、美味しく食事ができることや健康に活動できること、家族がいてくれること、もっと言えば、命が与えられていること自体が喜びなのです。日々の小さな出来事にも喜びを発見し、またそのことに感謝して生きる。喜

びや祈り、感謝を習慣化していくと、心が静まり、突然の事態にも動じなくなっていくと思います。感性って言うのは言い方を変えようと「点」ですね。知性とか理性は「線」です。線で物事を見るから、過去を引きずったり明日に怯えたりして、失敗してしまう。でも感性は点です。つい過去と比較したり、将来の不安を抱えたりしがちですけど、「今日できることは何だろう」という発想の切り替えがとても大切です。これを「前後裁断(せんごさいだん)」と言います。

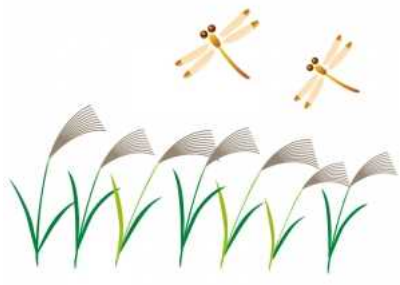
新型コロナウイルスは私達の意識を転換させようという天意をもって、与えられた問題だと捉えたならば、私達はコロナ禍を通してどう変化し、どう成長するか？恐れるだけではなく、これからの成長のチャンスにしましょう。一般的に問題というのは全て、人間を苦しめるために出てくるのではなく、人間を成長させるために、会社を発展させるために、社会をより良くするための天意だと思っています。その問題を乗り越えていくことによつてしか、次の新しい時代を生きる能力や人間性を獲得できないのかもしれない。

「昔は良かった」・「以前は元気だったし、もっと動けた…」という「過去」に執着していると、大切な「今」を失うことになりかねません。お互いに思い遣りの心を持つて支え合いましょ。コロナ感染者への誹

謗中傷は「正義」ではありません。やめましよう。誰も怨まないこと。どんなことであれ、これは巡り合わせと受け止めて、細かいことに執着しないこと。お互いに大変なのだ、相手を思い遣る心。これらを実践しましょう。これは幼稚園生や小学生でも知っているでしょうし、大人が実践している見本となる姿を見せてあげることが大切です。

いつか、目の前の危機が過ぎ去った時に、自分自身が深められて、危機前よりも人間的成長ができていくことに気付けると思っています。人生は何に気づくか？これが物凄く大事です。学ぶことよりも、自分が何に気づくか？その上で、気付きに基づいて実践すること。この気付きと実践の積み重ねによつて、よりよい人生を築く事ができるのだと思います。

合掌 副住職 谷川寛敬



来月のご案内で～す！



◎鬼子母尊神大祭
特別祈禱

・十月八日(木)
・午後二時より